

# 内蒙古で日本人学生は何を見たか

## ——東亜同文書院第6期生が記録した内蒙古と現代の 一日本人学生が見聞した内モンゴル自治区について——

愛知大学大学院文学研究科  
地域社会システム専攻修士課程

高木秀和

### [I]

#### はじめに

本論は、1901年に上海に開学した東亜同文書院の第6期生が中国調査旅行（以下、「大旅行」）のダイジェスト的な報告としてまとめた『禹域鴻爪』のうち、主に内蒙古が舞台となる「晋蒙隊旅行記」、「晋蒙隊旅行記（承前）」と、筆者が2006年夏に愛知大学国際中国学研究センター（COEプログラムに採択。以下、ICCSと略称）環境グループの調査補助員として同行した調査旅行のうち、内モンゴル自治区に滞在した際に記録したささやかな調査ノートから、年齢が近い学生がそれぞれどのような視点や関心からこの地域を記録したかを検討することを目的とする。もちろん、第6期生が「大旅行」を行ったのは1908年の夏から秋にかけてであり、筆者の見聞とは100年近い時間差があるうえ、後述するようにフフホトや包頭など拠点都市にはそれぞれ訪れているものの辿ったコースは異なっている。その他、当時の学生と現代の学生である筆者との間にはさまざまな差異があるが、本論ではそれらを承知の上で両者の記録をみていくことにする。その理由は、いくつもの違いがあるにせよ、似通った年齢の学生の手

により、しかも若者の好奇心あふれるまなざしで内蒙古（内モンゴル自治区）を記録しているという点、そして逆に100年という時間が当地域をどのように変容せしめ、さらにその時間差が学生の関心事をどのように変化させたかを一事例ではあるが明らかにすることができるからである。

なお本論では、戦後、東亜同文書院（のちに大学に昇格）関係者らの手により開学した愛知大学が2006年に開学60周年を迎えることになったが、その記念事業の一つとして出版が実現した『東亜同文書院大旅行誌』のオンデマンド版（全33巻＋解説1巻）のうち、2巻目の『禹域鴻爪』を底本として用いる<sup>1</sup>。

### [II]

#### 「大旅行」と第6期生の手による 『禹域鴻爪』について

東亜同文書院生の手による「大旅行」については、藤田佳久が検討を行っている（たとえば藤田，1989；藤田，1998；藤田，2000；藤田，2006）<sup>2</sup>ので、その詳細は藤田による既往研究に譲ることにして、ここでは第6期生によるそれを簡単に整理

しておきたい。なお、卒業論文としての調査報告のほかに「日誌」の提出が課せられるようになったのは19期生以降であるが<sup>3</sup>、彼らは当然ながらその提出は義務づけられてなくても自らの日記や野帳に見聞した事物を当初から記録している。また7期生以降は、調査ダイジェストが自分たちの手により刊行されたが<sup>4</sup>、6期生の段階ではそれが学友会会報（8、9号）に掲載されるという形式をとっている<sup>5</sup>。

前述の通り、第6期生は1908年の夏に「大旅行」に挑んだ。第5期生が「大旅行」1回目だったので、彼らは「大旅行」2回目となる。『禹域鴻爪』に「松本」氏が記した序文には、「斯くして重き責務と高き希望とを抱いて七月上浣炎熱闌なる時江南の一廓を去りし八拾名はよく其希望を満たし克く其責務を尽して光栄と満足とに飾られて秋尚浅き拾月の終に帰来しぬ。」<sup>6</sup>とある。「重き責務」とは、5期生の先輩が成し遂げた「大旅行」を受

け継ぐという意味もあろうが、同じく序文には「思ふに對清經營の為に生き對清經營の為に死するは我党の素志也。（後略）」<sup>7</sup>とあるように、そこには若き書院生たちの使命感や意気込みなどが大いに込められている。藤田（2006）は、「清朝政権が大きく揺らぎ始めていた時期（中略）、混乱と不安定化を増す清朝の政治体制について、それを書院の学生が「大旅行」を通じても肌で感じ、その安定改革方策について意識するようになった」<sup>8</sup>と分析している。

第6期生たちは、11のコース班と1つの北京駐在班に分かれて「大旅行」に参加した。藤田（1989ほか）は、第6期生の調査旅行コースを地図化している（図1）<sup>9</sup>。なかでも内蒙古方面を目指し、「晋蒙隊旅行記」をまとめた「第二班」の辿ったルートを確認すると、燕京（北京）を出立して調査区域の玄関口となる張家口に至り、そこから帰化城（フフホト）—包頭—帰化城—大同—張家口を巡

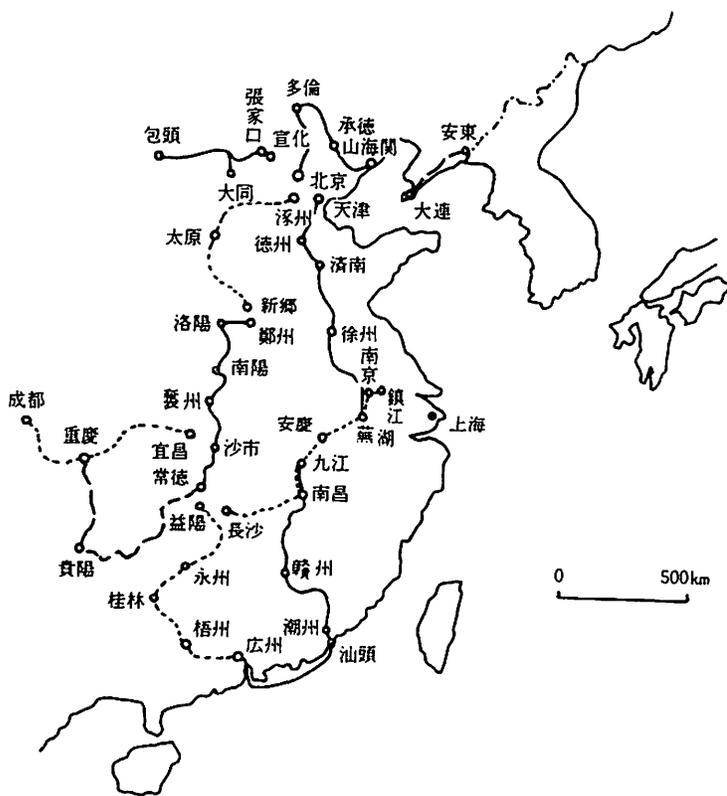


図1 第6期生の調査旅行コースと主な都市（コース以外に北京に1駐在班）  
（藤田（1989）を転載）

るという当時としては壮大なスケールの「大旅行」を敢行している。初期の「大旅行」において、内蒙古方面を目指した班が少ないだけに注目に値する。また、「晋蒙隊旅行記（承前）」も掲載し、学友会報の第八号、第九号と両号にわたりそのダイジェストを紹介していることから、他班よりも詳細に「大旅行」の成果を報告しているといえる。提出が義務づけられた「日誌」や、同期の「大旅行」経験者たちが編んだダイジェストがない6期生が残した記録としては、多くの情報を得ることができるといって大変貴重である。このような理由から、「第二班」の「晋蒙隊旅行記」と「晋蒙隊旅行記（承前）」を、分析の対象として用いることにする。

### [III]

#### 「晋蒙隊旅行記」にみる当時の日本人学生の 内蒙古に対する関心事

『東亜同文書院大学史』（大学史編纂委員会編、1982）には、「晋蒙隊旅行記」をまとめた玉生武一郎は栃木出身で、書院卒業後は「徳富蘇峰の中国旅行に随行した国民新聞」の記者<sup>10</sup>になったとある。しかし、1955年の時点ですでに逝去している<sup>11</sup>。

ところで、この「晋蒙隊旅行記」は地誌やエスノグラフとはいえないが、地名はさることながら、コース上の景観や風俗を端的に記録しているといえる。以下、玉生が記した「晋蒙隊旅行記」の内容を概略的に紹介することにより、当時の内蒙古周辺の様子をみていくことにしたい。また、旅行記の概略を一通り紹介したあと、若干の考察を加えたい。

なお、旅行記の概略を紹介する(1)および(2)節では、「晋蒙隊旅行記」と「晋蒙隊旅行記（承前）」からの引用が多くなり、その全てに注釈を付すのは煩雑なので、本論ではそれを略すことにする。

#### (1)「晋蒙隊旅行記」

玉生による「晋蒙隊旅行記」は、東亜同文書院学友会報第八号の89頁から110頁にわたり記載されている。

まず、章立てを記しておこう。

経過地方

はしがき

北京より張家口間

(1) 西貴市 (2) 南口居庸八達嶺

(3) 南京虫と蝸子 (4) 鷄鳴駅宣化府

張家口

張家口より帰化城

(1) 蒙古犬 (2) 寒気 (3) マレンチュイ

(4) 食事 (5) 竹の子先生 (6) 移住支那人

(7) 宿泊地 (8) 朔北の野 (9) 車中に眠る

(10) ローマンカトリック (11) ホルスタイン

の一夜 (12) テント生活 (13) 喇嘛教政策及  
蒙古人の将来

この章立てをみて分かるように、学友会報第八号には、帰化城（フフホト）に至るまでのルートで見聞した事物が描かれている。

まず旅行記の冒頭では、①出発日と帰院日、②経過地方、③「大旅行」出発前の状況が概説してある。②に関しては繰り返しになるが、すなわち①7月10日に上海東亜同文書院を出発、10月24日に帰院し、②主要都市のみを書き抜けば、北京—張家口—帰化城（フフホト）—包頭—帰化城—大同府—張家口—北京というコースを辿る「大旅行」であった。③この隊は、理学士出口氏と理科大学生豊原氏を迎えて編成されたが、玉生たちと同期である瀬戸氏が急病のため帰国し、不参加となった。95頁の記述によると、隊員は8名のようである。上海から天津へ至る船中では「前途朔北荒烟の地を思ひ又病める友を省れば転た感慨に堪えざる」と、これから始まる「大旅行」に一抹の不安を覚えるとともに、病床に臥している友の



ことを案じた。14日に天津に到着し、北京と天津では約10日間滞在した。滞在中は、卒業生たちの好意によって「準備調査其他」に費やすことができ、25日午前9時には帽子を振って出発した。出発時の隊編成は、「一行乗馬七駄馬一二套轎車一」台というものであった。

北京—張家口間は、距離420清里（中国の1里＝500m）、標高差2600尺あり、馬に乗って移動する彼らは「蒙古高原に漸次登りつゝある」という実感を得たようだった。初日の晩は、「西貴市」というほとんどの住民が新疆あたりからやってきた回教徒のトルキスタン人の子孫で構成される「一村落」に宿をとった。村の人々は「本店」をこの村におき、「北京の前門外頭に運送業を営んでいる」という。一行が泊まった「同和店」はその本家であり、羊料理でもてなされた。

翌日午前10時には「南口」に達し、ここからは「八達嶺に至る四十里の山路とな」る。この山（万里の長城）は、「歴代中華に君臨するものが最恐れし朔兎を防ぐ最後の頼」であり、ところどころに狼煙台の跡も残っているとしている。そして居庸関に至ると、玉生は鉄木真（テムジン。チンギス＝ハン）がそこで抱いたであろう壮大な野望に想いを馳せた。この後にもこのような記述がいくつか出てくるが、玉生たちはさまざまな知識を持ち合わせているので、彼らが持っている知識の「現場」の近くやそこに至ったときの感慨はひとしおのようであり、なおかつ若い彼らはロマンチスト的にさまざまな情景を思い浮かべている。なお、居庸関、八達嶺ともに、現在では万里の長城観光のハイライトであり、多くの観光客が訪れている。

さて、一行はさらに内陸を目指して進んでいくことになるが、「覚悟の事」とはいえ宿をとった「岔道」、「新安保」では「南京虫」（トコジラミ）の攻撃に悩まされ、夜も眠れず「一同の顔皆ふくれて色なし」となった。また、「岔道」では「蝎子」（サソリ）にも遭遇した。

八達嶺からは砂礫の多い高原の中の道を通るので、一見砂漠にみえるとしている。だが、「懷来県は果物に富める地」で、灼熱の中では果物は「何よりの慰」であり、「一同日々大なる西瓜十以上を平げ西瓜隊の名は何時の間にか付せられた」という。そして、「鶏鳴は詩的な駅なり」と述べているように、鶏鳴山の麓に「辺城」があり、山上に仏教寺院があるという風光明媚なところである。その前には「楊河」が流れているが、そこを渡ろうとしたときに風を伴った大雨に見舞われた。「響水堡」に至るまでの間は大きな峠が横たわり、そこではこの大「雨は強し馬時に倒れ物凄き事非常」というありさまであったが、頂上に立てば足元に雲海が広がり、山腹に目をやれば羊の群れが見えた。宣化府は名の知れた古都ではあるが城壁は荒廃し、「城内の半以上畑とな」っていた。そこでは、師範学堂の柿田氏を訪ね、帰途において滞在したいとの旨を伝えた。

宣化府をあとにして、北京を出発して以来最初の大都市である張家口を目指した。張家口の市外は「上堡」と「下堡」に分かれており、人口5、6万人で山西人が多く、「皮貨店其他の商舖軒を列ぶ」としている。物資の集散地でもあり、庫倫、帰化城、喇嘛廟の3方面からやってくる荷物が多く、冬季が一番賑わうという。張家口には「日商」の会社が2社ある。書院2期生の石井氏が経営する「義成洋行」と、浦氏が主任の「三井分行」である。ロシア人も多く、「上堡」には露清銀行がある。

ところで、到着の翌日には「察哈爾都統衙門の洋務局」を訪ねたが、数日後呼び出されて再度訪れると、調査に関する忠告を受けた。すなわち、「我々の中の或る者が日々山上にて地図を取り居る事を耳にせり、此地は北辺第一の要害の故を以て陸軍学堂の学生が練習の為にする測量も許さざる程なれば止められたしとの事也」という旨の忠告である。しかし、玉生と同行した隊員の宮崎氏は「覚束なき英語にて我々は銃取る人にはあらず

同文の徽章を頂きて両国の親和の為につくす商業学校の生徒なるを記録せられよと繰返した。彼らの主張からも分かるように、当時の初期の「大旅行」は学術調査旅行というよりは、「商業学校」生として両国の親善に尽くしたいという願いが表に出た「大旅行」であったといえる。このことは、先に引用した『禹域鴻爪』冒頭の「重き責務」に通じるものがある。

張家口には11日間滞在したが、彼らの滞在はどのようなものであったのだろうか。もちろん、このあとの記述からも窺えるように様々なものを好奇心旺盛に見聞していると思われるが、ここでは街の中を歩き回ったという記述はあまりみられない。その分、上述の洋務局でのやり取りに多くを割いている。その他、「日商」の古橋氏や浦氏とのやりとりや、宿では前述のように西瓜を平らげたエピソードを紹介している。しかし残念なこともあり、隊員の梅津氏が病気のために隊を離れ、帰国することになった。

張家口から帰化城に至るルートは3ルートある。すなわち、①張家口—大同府—得勝口—（塞外）—帰化城、②張家口—（すぐに「口外」に出る）—察哈爾遊牧地—帰化城、③張家口—（大同府手前で「口外」）—代哈泊—帰化城、の各ルートであるが、一行は②のルートを選択した。その理由を、「此は最北のものにして旅舎食料等の設備十分ならず時に馬賊出沒の恐ありとの事なるも多くの蒙古部落を通過する事なれば面白からんと思ひて也」としている。続けて、「尤も此路も冬期は天山南北路辺より来るキャラバンの交通路なれば相当の交通はあれども今は夏なれば道路も旅舎も荒れはてたらんとの事也」と記している。彼らは8月7日に送別の宴を開いてもらい、翌日は両替をし、9日に「二套轎車四台を雇うて二人宛分乗」し張家口を出発した。

ここからしばらくは、帰化城に達するまでに見聞した事物を記録している。

まずは、「ハンノルバ」である。コンディショ

ンの悪い道路を揺られながら車窓を眺めると、周囲の景観は秃山であり、「ハンノルバ」の急な坂を上りきれば広大な高原が広がる。「ハンノルバ」には人家三四散在す、其内や、広げなる家を扱みて投げ携帯せる白米を炊ぎて食べた。鉄木真は、「歴戦此地を過ぎりし時始めて中華平原の富と人との多きを望み見て世界統一の志を起した」という。その他「ハンノルバ」では、夜に便所へ行けないほどに恐ろしい「蒙古犬」や、「其激変驚くの外なし」と変化の大きい気温に驚きを隠せないようだった。

10日午前6時半に「ハンノルバ」を発ったが、道中は「波状高原にして東方更に天に聳ゆる大山脈」といった景観が広がり、朝は一面霧に包まれていたようだった。途中、菜の花畑のような黄色い絨毯のなかに、数千もの羊たちが戯れる姿をみた。「モンゴルテント」が数多く並ぶ「ポールツエイ」までは電信柱に並行してやってきたが、ここからは西に進路を変えて帰化城を目指すことになる。10日および翌日は雨天のため、「マレンチユイ」に宿をとった。「マレンチユイ」は、「支那人家六七テント三四近くに見」える集落である。ここでも「南京虫」に悩まされた。ここでは、彼らが薬を持参していることが知れ渡り、「其後蒙古テントを訪れし時も」何人かの病人やけが人がやって来るので煩わしくなり、「薬を有する事吹聴するを禁じた」としている。

玉生は食事について、項を立てて説明している。「土人の常食は小米の稀飯に山芋を食ふ位」で質素である。一方、玉生たち一行が食べる「烙餅」は「白麵に麻油を混じて焼きたるものにして持参の砂糖を加へて用ふ、幸に卵子廉なりければ滋養分には不足せず」としている。なお、野菜が口に入ることはまずなく、張家口までの行程のように、果物（西瓜）をたくさん食べる事ができた日々を回想している。

ただ、一行は現地住民のテントで寝泊りしているが、蒙古人のものではなく「余等宿をかるは何

時も此の移住民の家なり」と「移住支那人」が多く入り込み、開墾を進めていることを紹介し、「陰山山下に逃れつゝある」蒙古人を憐れんでいる。

「ハンノルバ」から「マレンチユイ」を経て、「ハノーバー」（人数分の寝床を宿にて確保できず、車中泊）、「ホントアン」、「ホルスタイン」（一軒屋の宿泊所。蒙古人の客が吸引する阿片の臭いに苦しめられた、「十日の旅行中最辛かりき」宿だった）、「魁元図」、「タイジユヤオツ」、「タオヘロン」（以上の「」内の地名は宿泊地）、そして帰化城へと至る彼らが通ったルート沿いは、いわゆる「朔北の野」とよばれる地域で「只尺余の牧草生ずるのみ」であり、夏期はオオカミなどの野獣も出没せず山羊が「心地よげに遊」ぶ光景がみられる。山地であるが「其傾斜非常に緩慢」であり、「大波のうねりに似たる原」というような雄大な景色が望めるが、「何等の変化なきに遂には飽きはて」てしまおうとしている。宿に到着すれば、「烙餅」を食べ、「毛布も敷き終り日記の筆を投じて外に出づれば月光清し。月！ 朔漠の月!!」と記しているように、月の美しさが心に留まったようである。「半宵」にはキャラバンの「駱駝の鈴の音」が聞こえた。そこには、駱駝が盗まれないように蒙古犬を同行させたという。

ところで、「口外に於てローマンカトリック派の活動は盛ん也」とし、「ナホーチエン」では現地住民たちが暮らす質素な家の間に壮麗な2階建ての教会があったといい、そこには白人の宣教師が6名おり、彼らとは「重（ママ）に支那語にて語」った。宣教師のなかにはルッテン氏という「口外を四年間跋涉して精密なる図を作」った者がいたが、玉生一行のつもりよりも優れていたのも、懇願して分けてもらった。なお、「此教会には附属の学堂あり」としており、このようなことから教会は一種のアカデミーや研究所としても機能していたといえる。

先に「移住支那人」と玉生一行の食生活に関する項があったが、蒙古人の生活文化について述べ

ている項もある（「テント生活」）。彼らの住居であるテントは、「直径一丈許りの円形のものにして皆羊毛を以て作りたる毡子にて蓋ひ之を駝毛にて作りたる縄にて結」んだものであるが、「我々の経過地方の蒙古人には大分開化の風に染みてテントの外に支那式の家屋を有するもの見たり、而して其テントの傍には三角の旗に喇嘛教經典の句を書きたるを立て居る多し」と、漢化が進行しつつあるがラマ教を信仰していることがうかがえる。蒙古人たちの気質とラマ教の信仰については、「性質は極めて単純快活にして宗教心に富」むとしている。その他、羊肉や乳製品が中心の食生活や、長けた乗馬技術に関して言及している。

最後に「喇嘛教政策及蒙古人の将来」という項を立て、20世紀初頭時点での現代的分析をおこなっている。それによると、時の為政者たちは蒙古人の獐猛さに恐れ、長城なども「殆ど何等の用を為さざるを悟」ったため、「陰険にして巧妙なる政策を取」った。すなわち、それは「モンゴルの喇嘛教を篤く信ずるを利し鋭意奨励し一面に於ては彼等が歡心を得ると同時に多面に於ては彼等をして過去及未来の問題に急ならしめ以て現在の榮華功名を思ふの暇なからしめ同時に其平和神秘なる教義により彼等の標悍殺伐戦を好むの性を和げ一挙兩得の功を収めんとせり」と、先述の「性質は極めて単純快活にして宗教心に富」むという蒙古人の気質を利用した政策といえる。また清朝は、蒙古人の人口増殖を恐れて相続者以外の男子を出家させるなどの政策をとった。このような政策下における蒙古人をみて、「其勇敢なる氣象（ママ）」は失せ、「所謂靈地巡礼を為して後生の安樂を希ふは其此世に於ける唯一の願望」であり、「人口は年一年と減少し蟄居其滅亡を待つに似たる」とラマ教が心の支えであると同時に、ラマ教優遇政策が彼らの生活や文化を破壊したとする。先に「移住支那人」の開墾について述べた部分があったが、漢族が蒙古人を徐々に追いやって「陰山天下に其テントを張るのみ」であり、そして「彼等

が其牛を売り羊を売りに漸く得し銀を腐敗せる活佛の用にと跪づく」とあるように、蒙古人を哀れんでいる。そして結末には、「鉄木真への祈願」という「ツールフルと云ふ門附のテントテントを流しありくもの」が歌う蒙古人の武勇伝といえる歌を紹介し、「此歌は彼等の最も愛唱するものなれども何となく衰滅の響あるにあらずや」と感想を述べている。

## (2)「晋蒙隊旅行記(承前)」

この文章は、学友会報第九号の75頁から87頁にわたり記載されている。

前節と同様に、まず章立てを記しておこう。

### 帰化城

(1) 衙門歴訪 (2) アブドル マチーダ君とマホメッド ハルカム君 (3) 胡土克図(括仏) (4) 中興棧

### 帰化城包頭鎮間

(1) 青塚 (2) 鄂博 (3) 土其其斯坦人 (4) 朔北の雨

### 包頭鎮

### 帰化城大同府間

(1) 穴居 (2) 代哈泊畔 (3) 豊鎮 (4) 入塞

### 大同府

(1) 見物 (2) 石窟寺

### 大同府張家口間

### 附記

「承前」では、冒頭に「暫く我をして漠南の野を紹介するを得せしめよ」としているように、彼らの「大旅行」は佳境に入る。8月18日、ようやく帰化城が目前に迫ってきた。玉生はこのときの光景をこう描写している。「北は陰山より南は殺虎口に至り西は目も遥かの鄂爾多斯砂漠に及ぶ大平原に五穀繁茂し樹林散在する風光の如何に我々を慰めしよ、やがて城壁は見え初め楊樹の森の上に雅美なる喇嘛塔は現れ何とは知らず我心は

勇む。進城!! 進城!! 夢にのみ見し帰化城!!」と、大きな期待を抱きながら夢にまで見た美しい帰化城の街へ勇んで入城した。

その後、交易上、政治上重要な位置にある帰化城の分析がなされている。玉生の目には帰化城は住みよい街と映り、住民は「何となく風雅にしてせよこましからず芝居の興行日としてあらざるはなく我々は宛も前世紀の年には入りしが如き心地」がしたと、訪問することが念願だった帰化城が理想郷のように感じられたのだろう。

彼らは帰化城到着の翌日、轎車4台に分乗して衙門を訪問している。道台衙門を訪ねたのち、綏遠城にて將軍に謁見しようとするが「公事を見つゝある由」不在であり、次に訪ねた歩隊第一営でも謁見できなかった。

9日間の滞在中、調査以外に「帰化城に日本の勢力を扶植して呉れんの意気込み」をもったうえ、「御手前の同文同種を説き廻」った。精力的にそんなことをしていると、さまざまな人々が彼らのもとにやってきたが、そのなかで辮髪・胡服という格好のアラビア人、アブドル・マチーダとマホメッド・ハルカムのことを記している。彼らは、玉生たちが大寺を訪ねた際に歓迎してくれ、回教徒の事情を詳しく教えてくれたものたちである。彼らは、玉生たちに日本語で揮毫を求めるとともに、アラビア文字で各所の回教徒宛の紹介状を書いてくれた。

玉生たちは滞在中、回教徒以外にもラマ教の活仏に会おうと寺院を赴いている。しかし、陰山の山中に避暑に赴いているとのことで、残念ながら会うことはできなかった。「承前」の冒頭での帰化城の概況のなかで、人口7~8万人中、2千人のラマ(教徒)を含むと述べている。

このように、積極的に様々なところを訪れているが、玉生たちが泊まった宿はどんなところであろうか。彼らは、帰化城第一の客棧(商人宿)である「中興棧」に宿をとったが、「我々をして其売買の実に大陸的にして壮大なるを想はしめ」た

という感想を記しているように、天津や新疆など各地からやって来た商人たちと交流している。

このような帰化城での滞在を終え、28日に4台の轎車を仕立てて出発した。彼らは、320清里離れた包頭鎮へ4日間かけて移動した。黄河を南にみながら「牧場農地相半し樹林も処々に散在する」道を行くと、見渡す限りオルドスの大高原に達した。「我等は此大自然に酔ひ或は想を悠々たる馬群れに寄せ或は天然の城壁の如き陰山を眺むるのみ」という感想を記しているように、雄大な景色に心を奪われたようであった。

ところで、帰化城端を離れるとき、南方に一つの小丘を望んだ。これは、「嗚呼是れ可憐漢家の子王昭君の芳骨を埋めたる」青塚である。いうまでもなく、彼女は政略結婚により前漢の王宮から匈奴の単于のもとに嫁いだ人であり、悲劇のヒロインとしてさまざまな作品に描かれた。玉生は、遠き長安に帰りたいが帰ることのできない王昭君の悲しみに思いを寄せている。

このような史跡のほか、民俗的な「蒙古人が山神地祇を祭る為めに造るものにして其円錐形の頂上に枯枝を挿み之に獣骨又は布片を懸け時としては此布片に西藏語又は蒙古語の銘を記」したオボ(写真1)も、興味深く見聞している。「変化少き



写真1 現在のオボ(2006年8月。フフホト郊外の大草原で筆者撮影)

高原に在るものなれば旅客には好箇の目標」と記しているように、日本の漁師たちが海上での位置を確認するためにおこなう「ヤマアテ(ヤマタテ、ヤマアワセ)」を彷彿とさせる。

帰化城出発翌日である29日の夜は、「トシユホ」に投宿した。ここでは、英語を話し、服装がインド人のような土耳其斯坦(トルキスタン)人2名と、中国人の従者数名と出会った。彼らは北京を目指すといい、大陸の東西を結ぶ交通が天山南北路を介して行われていた時代に思いを馳せた。

また、北京にて蒙古旅行者より聞いていた、短時間かつ局地的に降る突風を伴った『「棒の如き」雨』のことも記している。

このように、さまざまな事物を見聞しているうちに包頭鎮に達した。秋風が吹き、「九月とは云へ口外はべら棒に寒き一日の夕」刻、玉生たちは轎車を停めて高台からオルドスの大沙漠を眺め、「我は是れ雲の上人!!」というように雄大な気分浸った。包頭鎮では、大同府の王得勝將軍旗下の馬隊を訪問したり、「珍らしかりしは日本人に会せし事なり」と述べているように天津の売薬商である平氏と出会い、黄河の鯉を肴に遥か異郷の地で同胞に会えたことを喜び合った。記事内容から考えると、黄酒を酌み交わしたのは包頭鎮滞在の最終日のようである。

彼らは黄河の鯉を肴に酒宴(即席の「包頭鎮日本人会」)を開いたが、玉生は包頭鎮の記事の中で黄河の見聞録にその多くを割いている。簡単に要約すれば、①南海子という黄河を介した交易を行う村があり、寧夏まで約3週間かかるということ、②その川幅は玉生が想像していたよりは狭かったが、水量の多い濁流に驚いたということ、③「注意すべきは鎮の位置高ければ水の供給少」く、井戸の数も水量も豊富ではないので、水の便の悪さを案じた。

天津の商人・平氏に再会の約束をし、再び針路を帰化城に向けて出発した。帰化城に到着後、一行は9月14日には大同を目指して出発した。し

かし、先に『「棒の如き」雨』について記してあったが、ここでも出発時に遭遇し、雨後は寒気に襲われた。翌日は「シヤバノー」に滞在し、陰山を眺めると昨晚に降った雪で白くなっていた。

ところで、帰化城の平原では数多くの「穴居」(の民)に関心を抱いた。玉生の見聞によると、①黄土高原の南向き斜面には1間四方の入口を設けた「穴居」が60数個連なるが、②内部は意外に広くて清潔感があり、壁面をよく磨いているので光沢を放っている。③住民によれば「冬暖夏冷」であり、普通の家屋より住み心地はよいという。その後、人類の住居の始まりを「穴居」に求め、進化主義的な系譜をたどり、現在の家屋が出来上がったと考えている。

16日に代哈、17日には「チャンボツ」に宿をとった。そこでは美しい湖に出合った。舟や網を知らず、人の姿をほとんど映したこともないと思われる草地に横たわる大きな湖は「只静只聖」であり、夕映えの湖面を眺めた彼らはただその美しさに魅了されるのみだった。ただし、勇猛果敢な彼らのこと、湖畔に狐穴を見つけて「面白半分枯草を焼」いた。

18日、豊鎮に到着する前の厳しい寒さは「たまったものにあらず我々は早く塞内に逃げ込まんと車台に丸くなりて宿に着」いた。豊鎮は移住民に対する物資供給の要地で早くから発達した街であり、経済活動は活発だとしている。撫民府も置かれ、その福建出身の林老翁に会おうとしたが不在であった。だが、少翁が手厚くもてなしてくれ、宿では久々の老酒に酔い、その勢いで教会へ足を運んだ。その折、プロテスタントの宣教師や神父が会議のために集まっており、その中にサラチにて知り合ったオベレグ氏と再会している。

21日には少翁から借りた馬に乗って豊鎮を辞し、得勝口を経て、途中よりスウェーデン人の宣教師3名と共に大同府北門より入城した。「出づるの時覇者の倂あり入るの時又決して敗者の風あるにあらず」と、自分たちが敢行した「大旅行」

に自信を持っての再入城であった。

到着の翌日(22日)、「承満洲人」の知県を訪ねたがその談話は頗る礼に欠け、立腹してその場を離れた。その後、知府を訪ねているが、前者とは正反対の紳士であり、院長(根津一)の演説を聞いたことがあるということで、より一層親近感が湧いたようである。また、氏は福岡において対抗演習にもあたった経験があり、玉生たちのために「歩兵及速射砲二門の操練を命じて種々説明」をしてくれた。知府を辞し、教会堂を訪ねてみれば昨日のスウェーデン人が出迎えてくれ、バイオリンとオルガンの合奏で国歌を歌ってくれた。大同府の人々の風俗に関しては、「北魏の故都だけあり風俗何となく雅美にして婦人のスタイル等は絵に見し奈良朝時代の女人風俗そのまゝなり」としており、知府の紳士の対応とともに好印象を抱いたようだった。

滞在中は石窟寺(大同の石窟寺院)へも向かい、滞在調査中の「塚本工学博士」を訪ねた。大同石窟の大仏は奈良のそれよりも5寸ばかり低く、大小数万と刻まれた仏像をみて「実に奇観なり」という感想をもらしている。この日は知県にも出会い、22日の敵討よろしく塚本博士の通訳とともに「大いにいじめつけた」。

このように、思い出深い大同府を29日に出立し、張家口へ向かった。車窓から見える風景はもう秋色で、そんな風景を眺めていれば悪路もさほど気にはならなかった。10月2日、東口(張家口)に再び到着し、再度義成洋行の石井氏に歓待された。

5日、東口を發ち、北京へ向かった。その道中ではこの「大旅行」を振り返り、北京では山西隊や河南隊と握手を交わして無事を確認しあい、天津では同行した出口氏らと別れ、船路で上海の書院へ帰院した。そして、「幸福よ永に晋蒙隊に在れ」ということばでこの旅行記を結んでいる。

### (3) 若干の考察

本節では、以上の「晋蒙隊旅行記」と「同（承前）」の内容をもとに、彼らがとったルートの地図化（ただし、張家口ー大同府）と、彼らがルート上で関心を抱いた事項の整理をおこないたい。

表1は玉生たち「晋蒙隊」の旅程を、旅行記の記述をもとに表化したもので、図2は彼らをとったルートを、張家口から大同府間に限って地図化したものである<sup>12</sup>。当然であるが、彼らをとったルートのメインは当時の山西省と、その出入口に当たる張家口と包頭鎮および大同府間であり、旅行記の内容のほとんどがこの地域の記述となっている。地図化にあたり、宿泊・滞在した小村の位置が特定できないところもあり、図2ではおもなポイントのみ示した。表1の旅程をみれば、都市での滞在日数が多いことが分かるが、後半になるにしたがって日付を記していなかったり、記事の内容が薄くなるなど、その足取りを十分に把握できなかった。これは、往路と重なる部分が多いことと、紙幅に限られたためだと考えられる。

表2は、「晋蒙隊」が関心を抱いた事項を、旅行記の記述をもとにしてキーワード風に列挙したものである。彼らは、使命感を第一に掲げ、好奇心旺盛でロマンチスト的な性格をもち、書院やこれまでの人生で培ってきた中国語とその他言語の運用能力、豊富な知識・観察力を駆使して、積極的に事物を観察し、出会う人々とコミュニケーションをとっているといえる。これらの基本姿勢や性格をもつ彼(ら)の関心事を、記事内容から「地形・自然景観」、「史跡・仏教寺院」、「土着文化」、「外来文化」、「都市経済」、「日本人」（どこで誰と出会ったか）、「気象その他」に分類した。この表は、筆者が記事内容から取捨選択してキーワードを抜き出したものなので見落としもあるかと思うが、重要と思われる事項をまとめてみたものである。

「地形・自然景観」については、都市と都市の間で見聞・体感した事物が多くを占め、日本では

見ることのできないダイナミックな景観に心を奪われているが、逆にあまり変化のない風景に飽きたり、コンディションの悪い道路の移動を苦痛に感じるなどネガティブな感想を持ったこともあった。また「気象その他」では、寒暖の差が激しかったり、『「棒の如き」雨』など、変化の激しい気候環境に驚いている。

「史跡・仏教寺院」では、全体を通して鉄木真と万里の長城に関心があり、大同府の項では石窟寺院の記述が多くを占めている。

「土着文化」では、蒙古人の生活文化やラマ教に関心を抱いたといえる。とくに張家口から帰化城の間では危険でありながらも察哈爾遊牧地を貫くルートを選択したため、そこで見聞した蒙古人の生活文化やラマ教に、その記述の多くを割いている。

「外来文化」では、大距離を移動する交易活動や、ヨーロッパ人宣教師、中近東の回教徒など、多方面から多くの人々がこの地域に入り込んでいることがうかがえる。

「都市経済」に関しては、この旅行記全体からみればその占める幅は小さいといえるが、張家口の山西商人、帰化城の天津商人など、当時都市経済のなかでどこの商人が幅を利かせていたかが分かる。ただ、どの都市も物資集散の地という性格は変わらないといえる。

「日本人」に関しては、張家口の日商社員など、比較的北京・天津に近い都市に滞在していることが分かるが、包頭で出会った売薬商のように、遠路まで足を運んでいる者もいることがうかがえる。

「その他」に関しては、訪ねた都市ではその地域の行政の長などをまず訪ねていることが分かる。「気候」に関しては、先述の通りである。

表1 「晋蒙隊」の旅程 (明治41 (1908) 年)

月日	宿泊・滞在地	月日	宿泊・滞在地		
7月10日	上海東亜同文書院発	9月1日	包頭鎮着		
	(船中泊)		包頭鎮滞在		
	14日		天津着	包頭鎮発	
			天津・北京滞在	帰化城着・滞在	
	25日		北京発、西貴市泊	14日	帰化城発、シヤパノー泊?
	26日		岔道泊	15日	シヤパノー泊
	27日		新安保泊	16日	代哈泊
	28日		宣化府泊?	17日	チャンボツ泊
	29?日		張家口着	18日	豊鎮着
			張家口滞在		豊鎮滞在
8月9日	張家口発、ハンノルバ泊	21日	豊鎮発、大同府着?		
	10日	マレンチュイ泊		大同府滞在	
	11日	マレンチュイ泊	29日	大同府発	
	12日	ハノーバー泊	30日	望関東泊	
	13日	ホントアン泊	10月1日	旧懐安泊	
	14日	ホルスタイン泊		2日	張家口着
	15日	魁元図泊			張家口滞在
	16日	タイジユヤオツ泊		5日	張家口発
	17日	タオヘロン泊		9?日	北京着
	18日	帰化城着			北京・天津滞在
		帰化城滞在		20日	天津発
	28日	帰化城発、ピクチャー泊			(船中泊)
	29日	トシユホ泊		24日	上海東亜同文書院着
	30?日	薩拉齋泊			

(「晋蒙隊旅行記」「晋蒙隊旅行記 (承前)」の記述より作成)

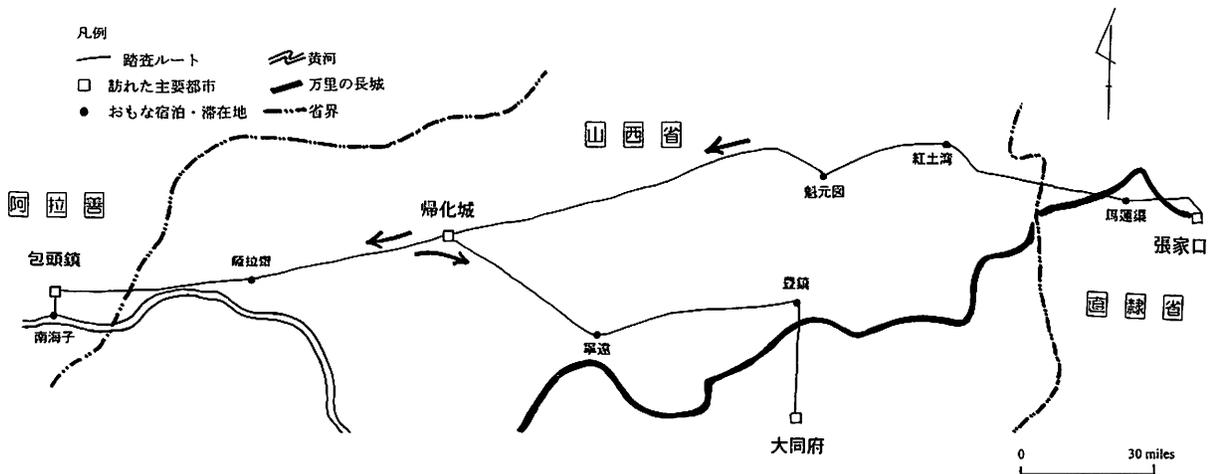


図2 「晋蒙隊」の tookたルート (『支那省別全誌 第17巻 山西省』附図 および「晋蒙隊旅行記 (承前)」の記述より作成)

表2 「晋蒙隊」が関心を抱いた事項

地名	地形・自然景観	史跡・仏教寺院	土着文化	外来文化	都市経済	日本人	気象その他
北京～張家口	八達嶺に至る山道、八達嶺からは砂礫が多い高原、その頂上から眺める「雲谷」と羊群	万里の長城関係（八達嶺の狼煙台跡・居庸関・鉄木真）、鷄鳴（寺院ほか）、宣化府の荒廃	馬に乗った蒙古人、南京虫・蝎子	回教徒（土耳古人の子孫）の村（西貫市）→運送業を営む		「師範学堂に教習柿田氏」（宣化府）	「果物に富める地」（八達嶺～）→「西瓜隊」の異名、楊河から響水堡に至る峠での強雨
張家口	張家口を一望できる西太平山	張家口の長城（石塊製）、張家口の語源、市街地の構造（下堡には小城あり）		ロシア人（露清銀行ほか）、洋務局での英語のやり取り（「此地は北辺第一の要害」と調査を咎められる）	山西人が皮貨店その他店舗を営む、物流の拠点、両替（銅貨→制錢）	義成洋行（書院2期生石井氏が経営、古橋氏、三井分行（浦氏）	張家口～棉化城までのルート選択（察哈爾遊牧地を通過するルート）
張家口～棉化城	コンディションの悪い道路、禿山、ハンノルバの峻坂→「登りつくせば約五千尺の高原際なく漣なく続くなり」、波状高原、朔北の野（一面の牧草地帯、傾斜が非常に緩慢な山→変化のない風景）、「大牧場」と夜になると狼や鬼が出そうな山（ホルスタイン手前）	ハンノルバと鉄木真、オールドスに眠る鉄木真、荒れ果てた古都カラコルム	「ハンノルバには人家三四散在」、蒙古犬、多くのモンゴルテント、喇嘛廟（ポールツエイ）、「支那人家六七テント三四近くに見ゆ」、南京虫・野菜のない食事（以上マレンチュイ）、土作りの家、蒙古人の習俗（テント生活・羊肉や乳製品が中心の食生活・貫頭衣・単純快活で宗教心に富む性質・卓越した乗馬技術と擻猛さ）、喇嘛教（戦略的な優遇政策と相統者以外の出家→人口減・「ツールフル」（門付）が歌う「鉄木真への祈願」）	移住支那人による開墾と蒙古人の駆逐、キャラバン、ローマカトリック（オホーチェンの教会と白人宣教師→支那語で対話、ルッテン氏作成の地図）、蒙古人がアヘンを吸飲（ホルスタイン）			寒気（激しい寒暖差）、烙餅、「竹の子先生」（マレンチュイほか）、美しい日の出と月、車中泊を数度経験
棉化城	「北は陰山より南は殺虎口に至り西は目も遙かの鄂爾多斯砂漠に及ぶ大平原に五穀繁茂し樹林散在する」、「やがて城壁は見え初め楊樹の森の上に雅美なる喇嘛塔」（入城までの景観）	綏遠城（新城。棉化城より東北5清里の位置にある）と棉化城（旧城）の簡単な紹介	「人皆何となく風雅」、喇嘛教と活仏の概略	清真大寺のアラビア人2名より回教徒の事情などを説明してもらい、商人宿での交流（天津・車倫・新疆などの商人、隊商が運んできた乾葡萄）	交通の要地、「上流の商人には天津人多く天津語は勢力を有す」、皮・織物工業、貧富の差小さく生活には便利		衙門、綏遠城と歩第一營の訪問、新式の教育を受けつつある八旗兵と護衛
棉化城～包頭鎮	「陰山々脈を北に黄河を南にせる大平原中を道は通じ付近は牧場農地相半し樹林も処々に散在する」	王昭君と青塚	オボ（その形状と巡礼の習慣・「旅客には好箇の目標」）	英語を話す洋服姿の土耳其斯坦（トルキスタン）人と支那人の従者（トシユホ）			晴天時の竜巻、朔北の「椽の如き」雨
包頭鎮	「陰山を背にし阿拉善を右にし左は以て王たるべき棉化城の平原を控え眼下には是れ万里天上より来る黄河の流あり」、オールドスの大砂漠、「鉄の位置高ければ水の供給少き」ため生ずる「住民の不便」、川幅は意外に狭い黄河	大きな城壁（「想ふに是れ甘肅の回教徒に備ふ」ため）	黄河の鯉料理と黄酒		南海子（「包頭鎮と甘肅との水運に依るの貿易を可る（中略）一小村」）	「天津の売薬商林君」	「九月とは云へ口外はべら椽に寒き一日の夕」、「王得勝將軍旗下の馬隊」の歓迎
棉化城～大同府	陰山の雪景色、「人烟稀なる草地に横はる一大湖」（「代哈泊畔」）	得勝口の長城（荒廃）、「東方の山上高く北魏の一帝陵を見る」（チンコリヨウ）	穴居（清潔で住み心地よい）	教会（「プロテスタントの在口外宣教師」、スウェーデン人宣教師3名とともに大同府へ入城）	「豊鎮は口外移住民に物資を供給する要地として早くより発達」		「雨後の寒気」、「漠南の寒」は「たまつたものにあらず」、撫民府でのもてなし
大同府		極めて雄大な城壁、上・下華嚴寺、石窟寺	「文廟らしきもの、開帳」（雅な風俗と奈良時代を彷彿とさせる婦人のスタイル）	来日経験のある知府、教会堂（スウェーデン人宣教師がパイオリンとハンドオルガンで国歌を演奏）		塚本工学博士と通訳樋口氏	無礼な知府姓、「温雅の紳士」で院長（根津）の演説を聞いたことのある知府、歩隊の歌氏との往来
大同府～張家口	樹木の紅葉→悪路も苦にならず、レスの谷	「地上一面に天然雪達する陽高天鎮」					

（「晋蒙隊旅行記」「晋蒙隊旅行記（承前）」の記述より作成）

[IV]

現代の日本人学生が見聞した  
内モンゴル自治区

(1) 2006年 ICCS 環境グループの中国調査旅行  
とその行程

愛知大学 ICCS 環境グループは、樫根勇 COE フェローを団長に、藤田佳久・宮沢哲男・大澤正治・李春利（李教授はフフホトまでの参加）愛知大学教授、中国地理科学研究所の宋猷王教授、朱安新 ICCS 研究補助員、愛知大学と南開大学・人民大学の二重学位（博士）を目指す大学院生、宋教授の下で学ぶ大学院生、筆者（ただし、筆者は補助要員として参加）の12人（ときに13人）のメンバーで中国の北半分を巡検した。日程は8月10日から27日までであり、北京、新疆（ウルムチ、トルファン）、寧夏（銀川など）、内モンゴル（フフホト）、東北三省（瀋陽、チチハル、ハルビン、長白山、大連など）を、飛行機と夜行列車、チャーターしたバスを主たる交通手段として巡ったものであった。書院生たちの「大旅行」とは比べ物にならない快適な現代の旅ではあったが、これだけ広範囲を巡ることができる旅は滅多に経験できるものではない。また、「環境」をメインテーマに、苛酷な自然環境のなかを生きる民の知恵を知る一方で、変貌を遂げつつある中国の現状と課題を考察することができた。

ところで、巡検も半ばに差し掛かった8月17日に、フフホトの北西にある大草原にて観光用のパオに宿泊した。そこでは、テント村ならぬ「パオ村」があるベースキャンプから馬に乗って出発し、遊牧民の若者たちの案内で元遊牧民の家を訪問したあと、道中にあるオボを参拝し、「パオ村」に戻ってくるというツアーに参加した。以下、大草原での体験を「エコ・ツーリズム」や「エスニック・ツーリズム」という観点から整理してみたい。

(2) フフホト郊外の大草原で体験した「エコ・ツーリズム」と元遊牧民たちの生活

ここでは、おもに元遊牧民宅の訪問で見聞したことを中心にまとめることにする。

われわれが訪ねた村は「希拉哈達（シラハタ）」村といい、十数世帯が分散して居住しており、それぞれの家の間が1～1.5km 離れているという。牧畜のほか、観光業や馬のレンタル経営がこの村のおもな生業のようだ。われわれは、1人あたり1時間50円で馬をレンタルした。

訪問した元遊牧民宅（写真2）は、住居は塼に囲まれるようなかたちになっているが、その外には家畜の糞が干されている（写真3）。おそらく燃料として使われるのだろう。電動ポンプのついた井戸も塼の外にあった。

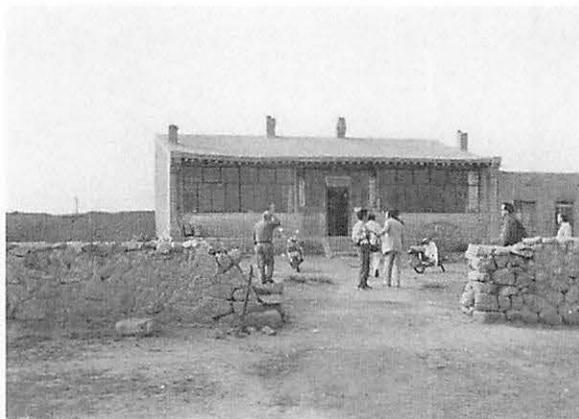


写真2 訪問した元遊牧民の家（2006年8月。フフホト郊外の大草原で筆者撮影）

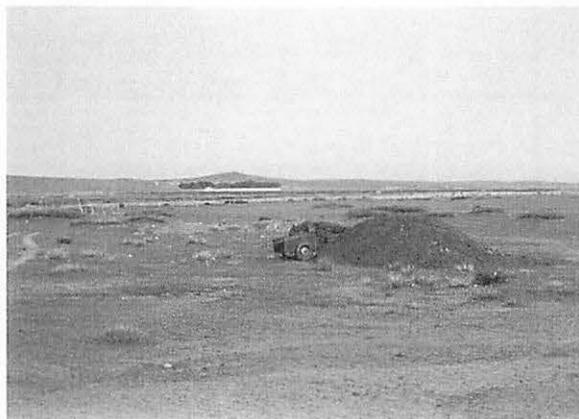


写真3 元遊牧民の家の前の地面には、家畜の糞が干されている（2006年8月。フフホト郊外の大草原で筆者撮影）



先導してくれた若者たちに促され住居（1970年代に完成）に入ると、玄関向かって左側が台所兼居間になっており、そこで家人の話を聞くことになった。なお、右側はおそらく寝室になっていると思われる。ここでは、女性（奥さん）が相手をしてくれた。彼女はまず、バター茶と乳製の食品（乾燥湯葉のようなものや飴状など）でもてなしてくれたのち、われわれが発する質問に答えてくれるようなかたちで対話が進んだ。帰り際、柵に並んでいる乳製品を購入し、再び馬に乗って「パオ村」へ帰ることになる。

彼女によると、政策により1983年に遊牧生活から定住生活が強いられ、その代償に2000ムー（1ムー＝6.667a）の土地が与えられた。与えられた土地は、遊牧をしていた頃に冬の住居としていた場所であり、草地を自由に扱えないので不自由を感じているという。また今年（2006年）、政府より羊1頭につき23ムーの土地が必要とされ、同様に5頭の羊が1頭の牛、6頭の牛が馬1頭に換算されるように、大きな制約が課せられるようになった。さらに、ここ3年は旱魃に見舞われ、ローンを組むほどの赤字経営なのだそうだ。政府からの規定では最高3人まで子どもを持てるというが、1人を育てるのに精一杯の状況だという。なお、彼女の娘は、若者たちとともに観光事業に携わっている。

その他、日暮れに開催されるナーダム（競馬と相撲）には元遊牧民宅へ案内してくれた若者たちが総出演し、夕食時には彼や彼女らが歌とダンスでもてなしてくれた。歌いながら白い布の上のせられた酒杯を勧めるというのが、歓迎のスタイルのようだ。夕食は、肉（羊肉）中心の料理か野菜中心の料理のどちらかを選ぶことができ、われわれは野菜中心の料理をセレクトしたので、食卓に料理が並ぶのが他のテーブルより遅かった。大草原の中の「パオ村」ではあるが、ジャガイモを中心に数種類の野菜と羊肉が食卓にのぼった。

### (3) 大草原の「エコ・ツーリズム」の課題

以上、元遊牧民たちの生活について聞き書き風にまとめてみたが、概して生活の状況は厳しいといえる。元遊牧民の彼女は、定着化の代償として2000ムーの土地が与えられたというが、地面をみると草は生えているものの風が強いため砂が吹き飛ばされ、礫が転がっているという状況だった。馬の上から眺める限りでは、貧弱な草原という印象を受けた。また、村での馬のレンタル経営と手を組むかたちで元遊牧民宅の訪問が実現しているのだが、受け入れ側の彼女によるとツアー客に乳製品を販売した利益のみが収入だという。

先述の通り、彼らが旧来より営んできた遊牧生活ができなくなり、定着し牧畜を営もうとしても大きな制約が加えられている。このような状況下、約20年前を嚆矢に観光パオがみられるようになり、約5年前には大規模なものが出現した。都市部の富裕層を中心に観光パオに訪れる人々が増え、観光化した村が金銭的に潤う姿を知ったこの村の人々は、その導入を選択したのだろう（写真4）。観光パオの経営は、若者たちに雇用機会を与え、まとまった現金収入をもたらしたという点ではプラスファクターとして評価できる。また、大きなホテルを建設しリゾート地化させるといったようなものではなく、比較的簡易な建材・工法によって「パオ村」がつけられたという点では自然環境への負荷は小さく、さらにツアー客に彼ら



写真4 われわれが宿泊した観光パオ村（2006年8月。フフホト郊外の大草原で筆者撮影）

モンゴル族の生活を体験してもらうというサービスを提供しているという意味では、「エコ・ツーリズム」に近いものが実現しているといっていよう。中国では、エコ・ツーリズムのほか、「民俗村」<sup>13</sup>や「農村観光」<sup>14</sup>に代表されるようなエスニック・ツーリズムが人気を集めている。

しかし、清水（2005）がこれまで提示された概念を整理したエコ・ツーリズムの理念、すなわち「地域の自然と文化に貢献すること」、「地域コミュニティにそのための資金と雇用を創出すること」、ツーリストへ環境「教育の場を提供すること」<sup>15</sup>には必ずしもそぐわず、清水のいう「一般的な自然観光ツアー」<sup>16</sup>の域に留まっているといえる。その理由は、先述したように観光業の成立が必ずしも当地域を豊かにしていないという点、定住政策により伝統的な生活スタイルは変化したといえるが、ツアー客が訪れる限りは若者たちをもっぱら観光業に従事せしめ、自民族の生活のスタイルを失ってしまっているのではないかという危惧、ゴミや汚水などによる環境汚染などが指摘できる。さらに、この地域でこのような形態の観光が大きな利益をもたらすことを中国沿岸部の開発業者が知ることになれば、彼らに経営を牛耳られ、自由を大きく奪われることになるだろう。

ただ、若者たちが自民族の文化であるナーダムなどを観客（おもに漢族。ときには外国人も訪れるだろう）<sup>17</sup>の目を意識しながらパフォーマンスすることは、観光人類学的にいえば一方通行的なホスト・ゲスト論を越えて、ゲストの「まなざし」からホストであるモンゴル族は「自らの文化を再確認する場」<sup>18</sup>を得るといふ双方向的な解釈が成り立つ。

また、環境面においても、自家発電した電気のストックがなくなれば自動的に消灯し、星明りで夜を過ごすことになる。温水シャワーも、太陽光で沸かした湯がなくなれば、ただ蛇口からは水が出てくるのみである。このように、環境に過度の負担をかけないかたちで「パオ村」を運営してい

るといえる。「教育の場」の有無については聞かなかったが、ムラで得た収入を上手く分配できるような仕組みができたなら、「エコ・ツーリズム」に一歩近づけるといえるのではないだろうか。

## [V]

### おわりに

以上、約100年前の東亜同文書院生と、現代の一学生が見聞した内蒙古の姿を検討してみた。玉生の旅行記を簡単に整理すれば、

①内陸の寒暖差が大きく『「棒の如き」雨』が降るように変化に富んだ気候、ダイナミックながらも変化の乏しい風景といった自然環境。

②ヨーロッパ系の宣教師・中国各地の商人を中心に、日本人も含めて広域から人々が入り込んでいる状況。

③蒙古人の領域に漢族が入り込み、ラマ教を巧みに利用しながら蒙古人を駆逐し、生活文化を漢化させ、蒙古人からはかつての獐猛さや武勇は感じられなくなった状況。

となるだろう。

その約100年後、同年代の筆者が内モンゴルを訪れてみると、①の『「棒の如き」雨』は体験できなかったが、寒暖差に富んだ気候やダイナミックな風景は感じることはできた。②に関していえば、筆者はさほどそのようなことを感じなかったが、前章の注17でみたように内モンゴルは外国人観光客が統計上多く、多方面から人々が入り込んでいるといえるだろう。

①・②に比べれば③の蒙古人の生活文化の漢化を強く感じ、包頭のような内モンゴル自治区の都市では、看板は中国語の簡体字とともにモンゴル文字の併記を義務付けているが、政治面や労働雇用面では漢族が力を持っているという。フフホト郊外で訪ねた元遊牧民の家は、旅行記にあったように漢族風の民家であり、少なくともわれわれが

訪ねた村では「テント生活」を営んでいなかった。また、都市部から富裕層の漢族が観光目的で訪れる現況も看過できない。しかし、自民族のアイデンティティを再確認することにより、自民族の文化とその生活舞台となる自然環境を保持し、持続可能な観光が自らの手で営まれることを期待したい。

[付記] 部外者にも関わらず ICCS 環境グループの調査への参加許可と手配をしてくださった ICCS 事務室の方々と諸先生、榎根・宋両先生をはじめとする ICCS 環境グループの先生方と参加院生の皆さん、そして今回の拙論の執筆と ICCS 環境グループ調査への参加を強くすすめて頂いた藤田佳久先生に感謝するとともに、調査期間中に掛けたご迷惑を深くお詫び申し上げたい。

- 1 東亜同文書院・編 (1909)、(2006再版)：『(オンデマンド版) 東亜同文書院大旅行誌 2 禹域鴻爪』、愛知大学 (オンデマンド版)。なお本論では、基本的に旧字などは常用漢字に改めて引用した。
- 2 藤田佳久 (1989)：「東亜同文書院学生の中国調査旅行コースについて」、『愛知大学国際問題研究所紀要』90、1-74頁、愛知大学国際問題研究所。のちに、藤田佳久 (2000) に所収。  
藤田佳久 (1998)：「東亜同文書院の中国調査旅行と書院生の描いた中国像」、『季刊地理学』50-4、273-286頁、東北地理学会。  
藤田佳久 (2000)：『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』(愛知大学文学会叢書V)、全349頁、大明堂。  
藤田佳久 (2006)：「東亜同文書院生の中国調査「大旅行」について」、『大倉山論集』52、153-196頁、大倉精神文化研究所。
- 3 たとえば、藤田佳久 (1998) 前掲論文。
- 4 たとえば、藤田佳久 (1989) 前掲論文。
- 5 たとえば、藤田佳久 (1989) 前掲論文。
- 6 前掲『禹域鴻爪』序文、29頁。文末に「松本記す」(p. 31) とあるが、『東亜同文書院大学史』(滬友会編、1955) 巻末の期別名簿 (306-307頁) で「松本」姓を探すと、「松本忠雄」氏の名が見つかる。他に「松本」姓は見当たらないため、氏が記したものと考えられる。
- 7 前掲6。
- 8 藤田佳久 (2006) 前掲論文。
- 9 たとえば、藤田佳久 (1989) 前掲論文。
- 10 大学史編纂委員会・編 (1982)：「第六期生回想録 悲しき「包一包」」、『東亜同文書院大学史——創立八十周年記念誌』、418-420頁。
- 11 『東亜同文書院大学史』(滬友会・編、1955) によると、「才人だったが不幸早世してあらわれなかった」(130頁) としている。
- 12 東亜同文会が編纂した『支那省別全誌』巻末の付図をもとに作成した。  
東亜同文会 (1920)：「山西省全図」(支那省別全誌第十七巻附図)、『支那省別全誌 第17巻 山西省』附図。
- 13 曾士才 (1998)：「中国のエスニック・ツーリズム——少数民族の若者たちと民族文化——」、『中国21』3、43-68頁、愛知大学現代中国学会。
- 14 侯若虹 (2004)：「癒しと発展をつなぐ農村観光」、『人民中国』2004. 11、30-35頁、人民中国社。
- 15 清水苗穂子 (2005)：「中国における新たなエコツーリズムの潮流——国際環境 NGO の試み」、『東アジア研究』42、47-59頁、大阪経済法科大学アジア研究所。
- 16 清水苗穂子 (2005) 前掲論文。
- 17 内モンゴル自治区は外国人観光客が多く、1990年代急増した。  
松村嘉久ほか (1999)：「中国におけるツーリズムの発展と政策」、『東アジア研究』26、15-38頁、大阪経済法科大学アジア研究所。
- 18 足立照也 (2000)：「エスニック・ツーリズムの可能性」、石原照敏ほか・編『新しい観光と地域社会』、49-62頁、古今書院。